

ホトトギス

昭和二十一年三月二十八日運輸省特別郵便掛號第六二七号
昭和二十一年十月十一日第三種郵便物認可(毎月一日発行)
平成二十一年十月一日発行(第四百二十二巻第十号)

ホトトギス

十月号



俳句随想 〔三百二十八〕

汀子

この平成二十一年は虚子没後五十年という節目の年に当る。虚子記念文学館では神奈川近代文学館と共催で「子規から虚子へ―近代俳句の夜明け展―」を約六週間に亘り開催して記録的な入場者数を迎えた。特に重厚で客観的なその図録は高い評価を得ることが出来た。明治初期の旧派の俳句から近代俳句への展開期の研究に大きく貢献するであろう。

又この期間中、サティライト・イヴェントとして企画した記念講演「虚子俳句の変遷」（稲畑汀子）、シンポジウム「花鳥諷詠」（有馬朗人、稲畑汀子、大串章、深見けん二、コーディネーター・稲岡長）、「虚子の客観写生」（稲畑廣太郎、今井肖子、岸本尚毅、筑紫磐井、コーディネーター・稲岡長）、「虚子十句」（今井千鶴子、金子兜太、辻桃子、安原葉、コーディネーター・稲畑汀子）は毎回札止めの盛況で、ホトトギス内外の論客による緊張した討論は聴衆を魅了した。

本年前半の虚子顕彰の行事はこのようなものであったが、本年後半の企画としてホトトギス俳句を世に知らしめるために一本を上梓しようと努力を傾注しているところである。

旬日記 汀子

平成二十年十月二日 大阪俱樂部

秋晴や雲の離合のなほつづ
小鳥来て芝を啄みはしめけり
食欲かな秋を樂しむ仲間あり
爽やかな朝のつづきでありこと
一本の秋の薔薇活けその夜より
この晴を夜々つなぎたし十三夜
天帝の意に秋晴のありにけり

十月二日 綿業俱樂部

色鳥の色を納めて止まりけり
とび立ちてまこと色鳥なりしかな
案内は秋の川辺を来られよと

十月四日 芦屋ホトギス会

森の音一つ加はる木の實かな
旅がちの今日は家居や秋の雨
コスモスを咲かせて人の住めるか
癒やされよ露寒ほどけゆく如く

十月五日 関西野分会

啄んでき 芦屋親しも眼白来る
山近き 苧屋 親しも眼白来る
信州の山ふところの蕎麦の秋
みちのくへ蕎麦畑つゞく旅路かな
来てをりしや 眼白でありしかな

十月五日 下萌旬会

水音を離れて水の澄むところ
今日のこと今日片づけて爽やかに
跡残し 菜虫の所在失せてをり
爽やかに語る病状ありにけり

十月六日 ロイヤル吟行会

三井寺の鐘の一打の払ふ露
薄紅葉のはいざなへる心あり
一面の霧 脱ぎ湖の景となる

又少し進む虚葉も選るも
旬日の西の虚子忌へ通る道も
十月九日 清交社
その中や訃報の告げてをりしこと
冷まじや訃報の告げてをりしこと
快晴のもたらせしもの冷まじや

十月十日 工業俱樂部

六月は我のまほろば秋の山
色深めゆく雨の又秋の山
一雨の一雨ごとこの秋の山
十月十一日 ホトギス社吟行会

十月十四日 西の虚子忌

露の山路幾たび露に濡れ訪ひし
この世に虚子の世偲ぶ五十年
よべの月まぼろしなるや雨の朝
十月十五日 夏潮旬会

十月十六日 クラブ合同

横川路の帰路の変幻身に入みぬ
新米と云はるるまでもなかりけり
横川路の紅葉絵巻のはじまり晴
ととびを忘れてしまふ秋の晴

十月十八日 九州ホトギス同人会

邂逅は句碑に身に入む心抱き
秋惜む名残の晴といふ旅路き
花火こまに加はる旅となりしこと
十月十九日 同人会第二旬会

十月十九日 九州ホトギス俳句大会

行秋の旅に寝惜みあることも
少し過去近づけて踏む草の露
十月二十一日 有恒俳旬会
刈りし田もこれよりの田も稲の朝
露惜む旅のつづきと急ぎな朝
秋寒の家路なりしと急ぎな朝
露識のたしかなるさ天高し秋
標識のたしかなるさ天高し秋

十月二十三日 きんぎょ会

稿値の遅れがちな身に入りぬ
一枝の遅れがちな身に入りぬ
一枝の遅れがちな身に入りぬ
一枝の遅れがちな身に入りぬ

十月二十四日 時雨旬会

夜は止むといふ雨止みぬそぞろ
秋高き肥後の旅路の遠ざかる
体調の戻つてをりぬ秋高し
色鳥の飛ぶとき黒と白となる

十月二十五日 旬会と講演の会

滞在の蘆も散歩の犬連れて
川尻の蘆も散歩の犬連れて
やゝ寒を心地よしとし旅にあり
年尾忌を明日に今宵を寝惜みあり
十月二十六日 年尾忌
年尾忌の三十年をふり返る
峰寺の紅葉を染めさせてゆく忌日
十月二十七日 野分会
枝渡り少しく近づく眼白かな
口に指当てて眼白の来しを告ぐ
秋惜む昨日の遠き目覚かな

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年十月一日 一水会

唐黍を九十五歳丸かじり
小鳥寄せ撓み初めたる大樹かな
木犀の香に俳磚の揺るぎ無く

十月一日 蕉心会

乗り換へて乗り継ぎ水の秋に着く
天高し康生さんはあの辺り
鳥渡る 大川といふ褥かな
そぞろ寒 阪神ほんま大丈夫
紅は日を白は風恋ふ萩なりし
馬肥ゆるとは蕉像の腰辺り
吃水を沈め船行く水の秋
天高しハイジャンプして届く君

十月六日 はせを句会

松手入潮風といふ伽のをり
虚子句碑といふ金風の褥かな
身に入みて七尾まだらに宴果つ

十月八日 十月六月浅賀魚木様御逝去

武士の思ひ出永遠に星月夜

十月九日 土筆会

障子貼る糊を練るのは子等の役
名苑の風を纏ひて小鳥来る
料る手に鯛弾んでをりにけり

十月十一日 ホトギス社吟行会

恐れたることが起りて夜寒かな
こんな筈ではなかつたと秋惜む
手賀沼の霧に昨日の悪夢消し
せめて爽やかに日本シリーズへ

十月十三日 虚子記念文学館投句

秋風を背に闘将去り行けり

十月十四日 西の虚子忌

阪神は落日西虚子忌は節目

十月十六日 登高会

陸稲てふカリフォルニアの大地かな
貼り終へし障子に夜の帳かな
柚子香る鍋に団欒ありにけり
柚子の皮落し一椀出来上る
蓋取りて先づ柚子の香といふ馳走

十月十八、十九日 九州ホトギス同人会、大会

句碑の文字撫で金風となりゆけり
秋晴の途切れることの無き空路
爽やかに生涯虚子の友として
丸ビルの縁を肥後に繋ぐ秋
花火果て八代の空広くなる
真筆の行間に聞く秋の声

十月二十一日 草木瓜会

甲子園球場工事赤蜻蛉
秋時雨夕日すとんと落しけり
秋時雨虚子に二つの忌日かな
嵐山真紅に染めて秋時雨
赤蜻蛉水を歪めてをりにけり
京上り下り迷うて秋時雨
秋時雨三度抜け来て湖北かな

十月二十一日 目黒学園句会

帽の上に雀遊ばせゐる案山子
新酒酌む父娘の絆ありにけり
泊雲と虚子の縁や新走
虚子塔に新酒の香り満ちみちて
前世はトップモデルといふ案山子

十月二十五日 ホトギス社句会

芦屋川藍に沈んでゆきにけり

十月二十六日 年尾忌

年尾忌や小幸の化身たりし君

十月二十七日 朝日カルチャー若草句会

猿酒と言ひて丹波の銘酒かな
銀杏を拾ふ主婦の座ありにけり
猿酒を酌む手が伸びる尾が生える

十月二十八日 若水句会

柿食うて子規の天寿でありにけり
秋の暮星光年を動かざる
秋の暮この監督でええかいな
丹波には銘酒灘には古酒の縁

雑詠

廣太郎 選

故里の花に喪の旅とはかなし 相模原 木村享史
 今生の花見納めて逝かれしと 同 同
 春眠の続きのやうに身罷りし 同 同
 岳麓の若葉の風へバスを降り 東京 川口利夫
 富士山のうかぶ蚕豆畑かな 同 同
 若葉してらふそく能を待つ古刹 同 同
 み吉野の宿の更けゆく春の星 京都 安原 葉
 その後の消息を聞く古茶淹れて 同 同
 大風の過ぎてどつさり杉落葉 同 同
 花落ちることの簡単チューリップ 熱海 嶋田一步
 海風の育てし赤きゼラニウム 同 同
 いろいろの更に色々花菖蒲 同 同
 夜の海の碧が一瞬はたたがみ 同 嶋田摩耶子
 片時も点とはならず岩燕 同 同
 流行に乗らぬ誇りや更衣 同 同
 己が影覆ひ育てて葛茂る 香川 湯川 雅
 変型に蕊といふ芯海芋咲く 同 同
 どの色も進化の過程七変化 同 同

夏館印度更紗の一間あり たつの 浅井青陽子
 帰省子の顔して三女訪ひ来たる 同 同
 散髪を終へし歸りの若葉道 同 同
 除幕待つ最後列に蝸牛 八尾 岩垣子鹿
 一匹の松蟬に呼び込まれたる 同 同
 緑蔭といふポケットに人溜る 同 同
 筍を掘る土を読み土を掻き 神戸 立村霜衣
 子の下りてくるたび滑り台薄暑 同 同
 白葡萄酒も新緑の色なりし 同 同
 星消えてより刻々の花の色 榎原 稲岡 長
 おぼろ月捉へ華やぐ高き梢 同 同
 むらさきの血筋紛れずなすび苗 同 同
 散策の遠くは行かず田植見に 福岡 松尾緑富
 田植見に流れを少し廻り 同 同
 梅雨寒やついでの用を頼まれて 同 同
 余生など来さうにもなき新茶汲む 神戸 山田弘子
 ふる里の名もなき新茶なれど佳し 同 同
 業平の通ひ路茅花流しかな 同 同
 初燕雨降りて止み降りて止み 徳島 上崎暮潮
 お札所の森の浮べる植田かな 同 同
 遠足や鉄橋長き吉野川 同 同
 極楽の文学に生き春惜む 福山 竹下陶子
 詩を詠めと松蟬の声天下る 同 同
 風花に天の筆築流れぬし 同 同

雑詠句評（九月号より）

むつみ・千鶴子・葉
静龍・眞理子・とほ歩
芳子・憲明・中正
美奇・保佳・廣太郎

春灯や虚子漱石の文机 東京 河野美奇

今年は虚子没後五十年にあたり、記念特別展が神奈川県立近代文学館に於いて開催された。「虚子の文机」は当然展示され、作者もすでに芦屋の虚子館で目にしておられる。そしてまた「漱石の文机」は開催された近代文学館の漱石コーナーに常設されているので、きつと見ておられたに違いない。作者の感動は「虚子漱石」のその二つの「文机」が同時に同じ館の中で拝見出来たことに尽きるだろう。「虚子」と「漱石」が共に学んでいる姿が時空を超え「文机」を淡く包む「春灯」によって浮かび上がってきたのである。十七文字では収めきれぬ管のない迸る感動をうまくまとめられたことに感動を覚える。（むつみ）

横浜の神奈川近代文学館には、夏目漱石愛用の文机がある。平成二十一年三月から四月にかけて行なわれた「子規から虚子へ」展で芦屋の虚子記念文学館から此処へ引越展示が行なわれた事は周知の通りである。そして虚子愛用の文机も展示された。漱石のそれとよく似ている、という意見が多かったが、それもその筈、

虚子が使っているのを漱石が実際に見て、似たものを買いためたという事だそう。今まではお互い離れて保管されていたものがこんな形で出会ったのである。何か漱石と虚子同士実際に出会ったような気分にもさせられる。時空を超えた重みがひしひしと伝わってくる。（廣太郎）

満開の花に狎るるを怖れけり 神戸 山田弘子

毎年吉野山へお花見に行く仲間の中での花形である作者は、誰でもその名前を知らない人はいないベテランである。常にピタリと言いつめてはずすことがない。掲句は花の美しさを表現するのに、文字をもつてした、どちらかと言えば理の勝った句である。「狎・怖」の二字は普段あまり常用されない。「狎」にはへなれしたしむ」と同時にへあなどる」の意があり、「怖」にはへどうしようかとこわがる」意がある。「満開の花の美しさになれしたしむ過ぎて敬度な感動を失ってしまったらどうしよう。そうならないようにしなければ」という自分への戒めをこめて、反面から満開の花の美しさを表現し、賛嘆している作者。（千鶴子）

お馴染み吉野山の句である。作者も毎年「吉野くつろぎの旅」には参加されており、年によってはその景もまちなちであるが、概ね絶景の桜を鑑賞しておられるのである。その絶景も、毎年見る事により「狎るる」事に怖れを感じているようにも見て取れるが、やはり絶景なのである。（廣太郎）

天地有情

女子選

和来よ建来よ花の句碑の許
 復活の主が舞はせたる落花とも
 鯉 幟 風の奈落の吉野建
 暮れ際は空もむらさき桐の花
 飾りたる鎧が肩を落しゐて
 彼に鳴き彼女に亀の鳴かざりし
 みちのくの雪嶺は人しのべとて
 草笛を吹いて故人をなつかしむ
 蕊深く真紅の薔薇の宿す影
 何もかもふつと忘れて薔薇手入
 女王花の香が湯上りの娘をつつむ
 女王花の香を引き月は天心へ
 由良川に沿ひ花桐に添ふ旅路
 水音の溢るる奥の涼しき灯
 青葉冷要心もまたわが山居
 またしても遠雷ありぬ友の忌に
 虚子の齡超してニ夕年桜見る
 歩くこと拒むわが足遅桜

東京 稲畑廣太郎
 同
 神戸 山田弘子
 同
 同 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 福山 竹下陶子
 同
 神戸 長山あや
 同
 たつの 浅井青陽子
 同
 徳島 上崎暮潮
 同

青レモン固き香りの高貴なり
 何もかも溜息ひとつ梅雨に入る
 鬱々とむれる匂ひや麦の秋
 刃を入れて玉葱の汁ほとぼしり
 暑さにも負けるな双子生れたり
 奈良朝の面立ち涼し吾子生るる
 復興の成りし山里春祭
 咲きそめし金縷梅に庭覚めにけり
 過去想ふばかりにあらざ籐寢椅子
 段取を考へてゐる籐寢椅子
 春惜むには恰好の雨一日
 日も風も奈良に明るきみどりの日
 早春の風渡るとき光る湖
 降りに降る天をよろこび雨蛙
 更衣生き長らへてゐるとふと
 水遣れば応へて匂ひゼラニウム
 退院の元気を包み更衣
 退院し街人となる更衣

東京 今井千鶴子
 同
 樞原 稲岡 長
 同
 豊中 瀧 青佳
 同
 京都 安原 葉
 同
 神戸 三村純也
 同
 吹田 宮崎 正
 同
 箕面 井上浩一郎
 同
 熱海 嶋田摩耶子
 同
 嶋田 一步
 同

天地有情句評

汀子

亡くなった人への追慕。

何もかもふつと忘れて薔薇手入 龍ヶ崎 今橋真理子

心にかかることを忘れさせてくれる薔薇の手入れ。

和来よ建来よ花の句碑の許 東京 稲畑廣太郎

女王花の香が湯上りの娘をつつむ 福山 竹下陶子

和（ゆたか）建（たつ）と縁の深かった吉野山の花の句碑。

湯上りの娘の匂やかさに加え女王花の香り。

暮れ際は空もむらさき桐の花 神戸 山田弘子

水音の溢るる奥の涼しき灯 神戸 長山あや

空の紫桐の花の紫。

涼しくともされた灯と水音の妙。

彼に鳴き彼女に亀の鳴かざりし 神戸 後藤比奈夫

青葉冷要心もまたわが山居 たつの 浅井青陽子

亀鳴くという季題の夢と現実。

百歳の長寿を迎えられる心構え。

みちのくの雪嶺は人しのべとて 熊本 岩岡中正

（以下略）